

住民の自己学習活動 —— 自主学習グループの活動を通して ——

桜 井 通

(東京都足立区教育委員会)

はじめに

わが国においては、「生涯教育」、「生涯学習」が叫ばれてから久しいが、ここ東京の下町である足立区においても、近年、「生涯学習」へ向けての動きが大変顕著である。それは、行政レベルでの取り組みや住民の学習活動が年々盛んとなっていることでみることができる。

行政レベル⁽¹⁾でいえば、地域の社会教育施設の整備・充実と生涯学習推進の専管部署⁽²⁾の設置により、推進体制への方途が明らかになってきていることである。また、これに先だって、60年8月に第3期社会教育委員会議によって、「足立区における生涯教育のあり方とその基本的方策について」が答申⁽³⁾された。その答申を受けて、具体的施策のあり方が、庁内プロジェクトチームによって検討され、62年6月にその報告書「学びあうまち足立の創造のために」⁽⁴⁾(足立区生涯教育推進構想)が提出されたところである。

また、住民の学習活動も、社会教育施設の整備、充実や生涯学習への高まりの中で、ますます盛んとなっている。

ここでは、そうした住民の学習活動の高まりの中で、自己学習活動への道すじを明らかにしてみたい。自己学習とは、「学習者が自ら自覚的な主体

となってそれぞれの選んだ学習方法によりながら、独りで学習し課題を解決するとともに自己の向上を図ることである。」といわれている。これは、⁽⁵⁾個別化された学習を意味するのではなく、他人との共同学習のなかで自己主導の学習過程をもつことであり、今日、数多く行なわれている成人教育事業修了後に生まれる“自主学習グループ”の活動にその過程をみることができる。⁽⁶⁾

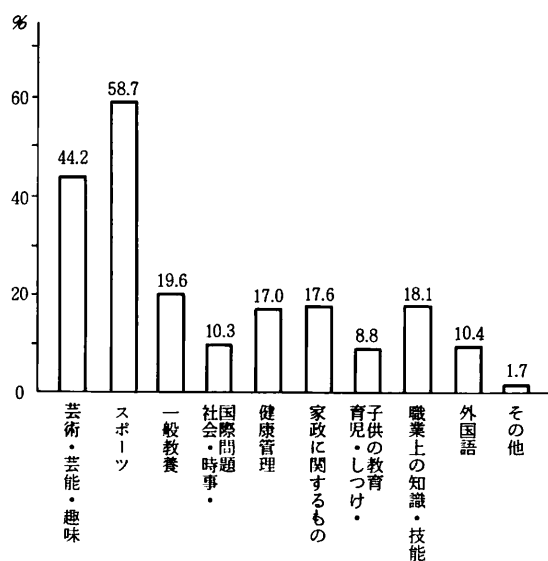
この小論では、これらのグループの自己学習活動の道すじを明らかにしてみたい。

1. 学習活動の高まり

——区の世論調査にみる⁽⁷⁾——

最近、実施された区の世論調査によれば、「生涯教育」、「生涯学習」についての周知度は女性で30%、男性では50%の人が知っていると回答してい

図1 活動内容



る。また、“仕事や家事学業のほかに教養を高めたり、趣味や生活などについての学習やスポーツ活動”を「現在している人は」は38%、「現在していないが今後してみたい」と回答した人は36%という結果であった。今後しだいに学習が盛んとなることが十分考えられるわけである。

さて、「現在している」活動内容であるが、その内容は図1の通りである。

これで見ると、「スポーツ」、「芸術、芸能、趣味」は、いずれも高い比率を示している。「スポーツ」が大変盛んである理由としては、本区は、従来、学習・文化施設よりも早く体育・スポーツ施設の整備・充実が行なわれたことによるものと考えられる。

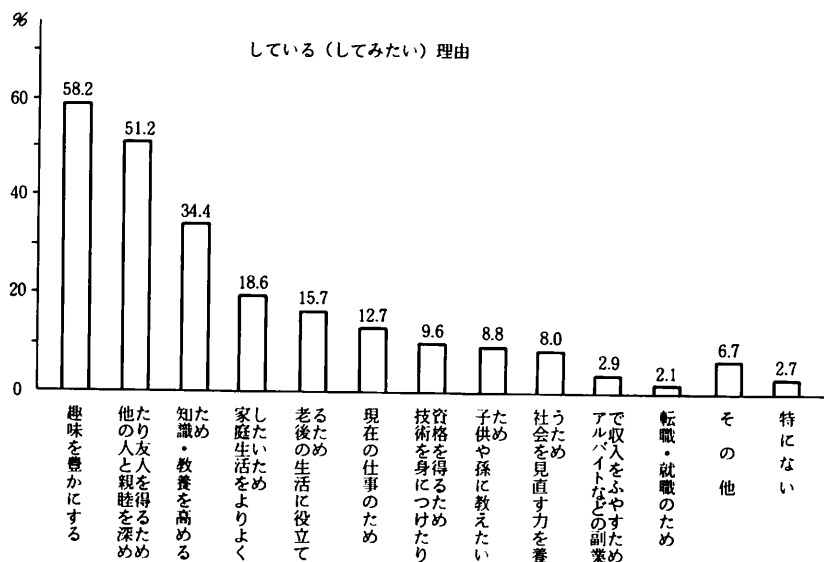
一方、学習・文化施設も、今日では、区の基本計画で計画された13のブロックセンター（社会教育館、体育館、図書館の複合施設）の建設もほぼ終わりを迎えている。また、このセンターでは、区より管理・運営を委託された（⁽⁸⁾）財足立区コミュニティ文化・スポーツ公社によって、昭和58年より教育委員会社会教育課と役割分担をし、趣味的、実用的領域の教室を実施している。その修了者が自主的なグループとしてまとまり、継続して学習・文化活動をしている。さらに、こうした社会教育施設を利用して、社会教育課の様々な事業も行なわれている。

このほか、区長部局の所管となっている人口一万人程度に1か所の住区センター（⁽⁹⁾）（児童館、老人館、集会所機能を併設する複合施設）では、地元の自主的な管理運営によって様々な自主事業が行なわれている。

また、こうした学習、文化活動の目的、理由については、次のような結果がでている。

「趣味を豊かにする」58.8%が最も高く、次いで、「他の人と親睦を深めたり友人を得るため」51.2%、「知識・教養を高めるため」34.4%、「老後の生活に役立てるため」15.7%などとなっており、「現在の仕事のため」や「技術を身につけたり、資格を取るため」、「アルバイトなどの副業で収入をふやすために」など、実益を目的としたものよりも、“豊かさ、楽しみ、教養”といった目的が高いといえる。

図2 活動の目的



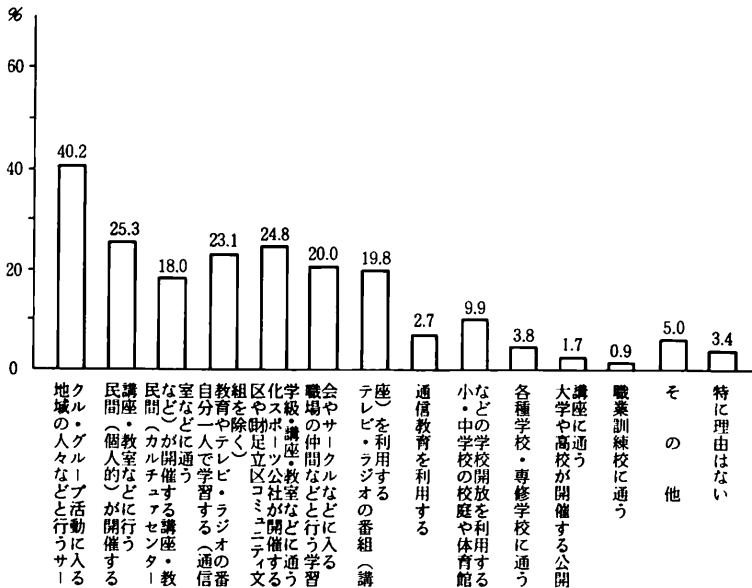
ところで、活動（かどつ）をしている人（ひと）のその実現（じつげん）の方法（はうほう）であるが、それは、先の調査（ちささ）では、次のような回答（こたへ）となっている。

これらの実現（じつげん）方法を方法（はうほう）別に分類（ぶんれい）すると、

- ・「地域（ちいき）の人（ひと）々（々）と行（い）う」、「職場（しやくば）の仲間（ななか）」などサークル・グループ活動（かどつ）
.....60.2%
- ・「民間（みんかん）（個人的（こど立的））」、「民間（みんかん）（カルチャーセンター）」などが開催（かいさつ）する講座（こうざ）・教室（きやうしつ）などに通（か）う.....43.3%
- ・「自分（じぶん）一人（ひとり）で」、「テレビ・ラジオ（らじお）の番組（ばんぐみ）」、「通信（つうしん）教育（きやういく）など」個人（こじん）学習（がくしゆ）
.....48.6%
- ・「区（く）や助（すけ）足（あ）立（た）区（く）コ（コ）ミュ（ミ）ニ（ニ）ティ文化（ぶんか）・ス（ス）ポ（ポ）ーツ公（こう）社（しゃ）」が開催（かいさつ）する学級（がくきゅう）・講座（こうざ）・教室（きやうしつ）などに通（か）う.....24.8%
- ・その他（その他）.....24.7%

この回答（こたへ）によれば、区（く）や公（こう）社（しゃ）の教室（きやうしつ）等（ら）への参加（さんか）は、決して多（おほ）くはないの

図3 活動参加への実現方法



であるが、今後の参加率の増加を考えれば、こうした学習、文化、スポーツの様々な機関との相互の連携協力が要請されることになる。そこから、住民のニーズに応じた学習機会提供が適切に行なわれていくのである。

このように、本区では、近年の学習・文化スポーツ施設の整備、充実とともに、住民の学習・文化活動の場が保障されてきており、今後、ますます、学習・文化活動が盛んになることが、十分に考えられるのである。

2. “自己学習へのプロセス”

——幾つかの学級・講座を通じて——

先の調査でも明らかなように、住民自身が自ら行っている学習活動は、地域で様々に行なわれているが、ここでは、区の社会教育行政が提供している学級、講座を修了してグループとしてまとまって継続的に学習活動を

表1 自主学習グループ登録団体名

Na	グ ル ー プ 名	学 習 内 容	会員	結成年
1	三 丸 俳 句 会	俳 句	21	昭和41年
2	木 陽 会	油 絵	24	50
3	足 立 書 道 会	書 道	14	51
4	朧 句 会	俳 句	32	52
5	同好会 編み物教室	編 み 物	49	52
6	足 立 版 画 の 会	木 版 画	32	52
7	金 曜 美 術 ク ラ ブ	油 絵	22	53
8	愛 陶 会	陶 芸	11	53
9	竹の子 読書研究会	読 書 会	17	54
10	竹の子フラワーサークル	アートフラワー制作	20	54
11	書 友 会	書 道	23	55
12	文学セミナー むらさき会	日 本 文 学	24	55
13	弥 生 会	文 章 演 習	15	56
14	ま り も	婦 人 教 養	11	54
15	足 立 川 柳 会	現 代 川 柳	30	56
16	な で し こ 会	生 け 花	21	56
17	さ つ き 会	婦 人 教 養	16	56
18	藤 の 会	藤 手 芸	20	56
19	竹 波 会	茶 道	10	57
20	古典文学 あ か ね 会	日 本 古 典 文 学	60	57
21	美 蓉 会	着 付	16	58
22	和 波 会	茶 道	14	58
23	雨 垂 会	書 道	26	58
24	中央陶芸 サークル	陶 芸	21	58
25	アンサンブルフレット	クラシックギター演奏	12	58
26	た ち ば な 会	い け 花	12	58
27	し お り 会	紙 工 芸	13	59
28	十 二 色	油 絵	19	59
29	古典芸能「華」の会	能 楽 研 究	53	60
30	ひ か り 会	婦 人 教 養	24	60
31	「かたつむり」	社 会 福 祉	24	60
32	あだち女性史研究会	足立区の女性史	23	60
33	シネマ愛好会	映 画	18	61
34	サイエンス21の会	宇宙科学・人文科学	29	61
35	す い せ い 会	婦 人 問 題	16	60
36	美 術 愛 好 会	美 術 史	63	61
37	れ ん げ の 会	婦 人 問 題	38	62
38	は ぐ く み	育ちあいの教育学	12	62
39	か け は し	日本語ボランティア	11	62
40	め め ん と ・ も り	生と死の学習	18	62

している事例を取り上げてみた。

表1は、区の社会教育課に登録⁰⁰してある成人の自主学習グループである。いずれも、社会教育課の実施事業の修了者からできたものである。

これらの自主学習グループの成り立ちは、先に指摘したように区社会教育課の開設事業がきっかけであり、主に“成人学校”、“婦人学級”、“婦人セミナー”、“婦人大学”、“成人セミナー”、“区民大学”などがその母体である。

例えば、成人学校から生まれたグループは、編み物の「同好会編み物教室」や、木版画の「足立版画の会」、油絵の「金曜美術クラブ」などである。婦人セミナーでは、近代文学を取り上げた際にできた、「むらさき会」、ボランティアについて学習をしてきた「かたつむり」、文章演習から生まれた「弥生会」あるいは、近年の国際化の中で区内在住外国人のための「日本語ボランティア」の養成をはかってできた「かけはし」などである。

このほか、“婦人大学”の第1期、第2期、第3期の修了生から生まれた「あだち女性史研究会」、「すいせい会」、「れんげの会」がある。

成人一般を対象とする“成人セミナー”からは、能の研究の「華の会」、映画鑑賞の「シネマ愛好会」があり、“区民大学”からは13期の「サイエンス21の会」、15期の教育の学習からできた「はぐくみ」、16期のいのちを考える——生と死の学習——からは、「めめんと・もり」が生まれた。

(1) 婦人教育事業を通して

足立区では、従来より「婦人学級」を実施してきたが、“国際婦人年”を境にして、婦人対象の事業がより充実してきている。婦人学級に加えて、「婦人セミナー」の開設、また、地域における婦人リーダー養成のために開設された「婦人大学」がある。

① 弥生会

ここでは、昭和55年に開設された第5回「婦人セミナー（文章演習）」から生まれた自主グループ「弥生会」を、まず、取り上げてみよう。56年4

54 特集 民間生涯教育事業の現状と課題

月に会を発足させ、現在、月2回の例会を開き、15名の会員から成り立っており、例会は、自主学習の日と、講師を招いて、指導を受ける日と構成されている。

学習内容は、まず、それぞれの人が文章を書くことであり、毎月、テーマによって講師の講義を受けることである。また、各自が、順番に研究テーマを発表し、皆で意見交換をする。その具体的内容は、61年の活動内容を紹介してみると、以下のような展開である。（61年1月～3月）

年月	学習その他	提出作品
61.1	創造力を伸ばすために 作品集II発行	『山に向って』 『冬の弔い』
2	創造力（知恵）を伸ばすために カフカ「城」読後感想文または、 本、読書についての文を発表	『希望の足音』 『祖母の絵本』 『まゆの中のおつう』 『まっこ』
3	勘（カン）とは何か カフカ「道化師の哲学」、「城」の 感想文	『ひと目惚れ』 『父の厚い胸』 『日焼け』

このグループは、結成以来、6年の間に、自主出版で文集を2号まで出している。『⁰⁰霽』である。発刊の辞を拾ってみると、

「書くという行為は、私たちが毎日の暮らしの中でことばを確かめていく作業であり、自己表現をしていくことです」、これは、グループ専任の講師の言葉であるが、この言葉が、“家庭の中にあって、目的意識を持った行動を起こしたいと模索する者へ、一燈を点じた”とメンバーの主婦たちにつながったようである。

また、こうも記している。「私たち各年代の主婦たちが、勉強を始めて三年。途中参加した人達を含め、この機会こそ視界を展く時期と考え、稚拙

ながら各々の篇を文章に纏め、ここに発行することにいたしました。」

この文にあらわれているように、主婦の日常からの飛躍の想いと期待を感じとれる。さらに続く。「こうして初めて船出をした私たち、棹を立て、水脈を探し求めて行く路。浅瀬に迷い滞る時が多くとも、先人の標を頼り、師の燈りに助けられ、船を進めていきたいと、誌名を『滞』といたしました。」誌名をつけるにも、十分時間をかけ、熱い想いが込められているようである。

62年6月に発行された第2号の作品を幾つか紹介してみると、絵本作家である画家の田島征三の絵と生き方を描いた『日々の暮らしの中で』、中国残留孤児についての『おんな・流浪』、短編の推理小説『赤い紐』、戦前から戦後にかけての一女性の生い立ちを長編小説とした『随縁の巢』、社会主義運動に生きた女性の半生を第1号に続き綴った『炎の女』など、力作揃いであり、それぞれの人が想いを込めて創作した作品なのである。

② かけはし

次に、61年に11回にわたって行なわれた“日本語ボランティア養成講座”から生まれた自主グループ「かけはし」を、取り上げてみる。

この講座は、第15回目の婦人セミナーとして開設されたが、開設の主旨は、海外から帰国した人や外国人の方々を温かく迎え、一日も早く日本語を覚え、日本の文化や生活環境になじんでもらうために、日本語ボランティアを養成することをねらいとしている。

また、この講座は、日本語のみを使って日本語を教えるということで、27名の婦人が修了し、引き続き、12回のプログラムが生まれ6か月間にわたる学習を終え、「かけはし」というボランティアグループが生まれたのである。「かけはし」というグループ名は、日本に在住している外国人のために、微力ながら主婦の力が役に立ち、日本と世界を結ぶ「かけはし」になればという願いからである。

62年度になってからは、グループで初心者のための日本語講座を開設し、区内在住の外国人を受講生として、日本語を教えている。

表2 日本語ボランティア養成講座

月 日	内 容	講 師
6. 18	日本語の構造	日本語教師 沢邑 やす子
6. 23	動詞の分類, 活用, 用法	
6. 25	形容詞 / 形容動詞の分類, 活用	
6. 30	助 詞	
7. 2	自動詞, 他動詞	
7. 7	表現…意志, 判断, 願望	
7. 9	表現…推量, 伝聞	
7. 14	表現…条件, 可能形, やりもらい	
7. 16	表現…受身, 使役, 敬語	
7. 21	教案の作り方, 漢字の教え方, ポイントのおさえ方, 導入のしかた	
7. 23	ドリルのしかた, 確認のしかた	

表3

月 日	学 習	内 容
9月29日	第1課 何時ですか	第2課 いくらですか
10月6日	第3課 どこにありますか	第4課 何時におきますか
10月13日	第5課 なにをしますか	第6課 どうでしたか
10月20日	第7課 ちょっとまってください	第8課 はじめまして
10月27日	第9課 おそいとおもいました	第10課 京都でとった写真です
11月5日	第11課 やめたほうがいいでしょう	第12課 時間がなかったんです
11月10日	第13課 書こうとおもって	第14課 かりてもいいですか
11月17日	第15課 日本人形をほしがっています	第16課 家事が合ったそうです
11月26日	第17課 買えません	第18課 まどがあいています
12月1日	第19課 ご兄弟は居らっしゃいますか	第20課 父がくれたんです
12月8日	第21課 見ていただけませんか	第22課 おにもつおもちしましょう
12月15日	第23課 ぼくにやらせてください	第24課 カメラをとられました

この「かけはし」のリーダーの方は、「力は未熟ですが、市民レベルで市民外交官としての役目が、日本語を教える事を通して果たせたら、日本語ボランティアを志す者一同これ以上のよろこびはありません。」と語っている。まさに、国際化が叫ばれる中で、草の根の市民交流をもたらし、求められる市民像である。また、学んだことが自己の内にとどまらず、実践となり、地域社会へ還元されるという大変貴重な例である。

③ あだち女性史研究会

三番目に登場する婦人の自主学習グループは、「あだち女性史研究会」である。昭和59年に24回にわたって行なわれた“婦人大学”第1期の修了生からできたものであり、足立の女性史を掘り起こし、今日までの女性のあり様を理解し、探求するものである。

60年度から、研究会発足と同時に、掘り起こしの作業が開始され、班に分かれて、進めている。班は、銃後班、遊郭班、農村班、教育班、労働班と分かれており、それぞれ、文献や旧世代の人から聞き書きを続けている。研究会には、専任の女性史研究者が加っており、十分な取り組みが進められている。63年には、あだちの『女性史』として出版することになっている。

この会の中心的な役割を果たしている女性たちは、その多くが、これまでの小、中学校PTAの活動を土台としている。子育てに手がかからなくなって、女性としての自分の生き方を問い始めてきた過程で、こうした学習グループにそれぞれの人が出会ったためであると思う。

メンバーである一人の女性は、このように記している。「かつて地域の歴史に子ども達の風物誌を織り込んでゆくという作業をPTA活動の一環として経験した私には、女性史の中で、再び聞き取り作業に参加することになって、……(略)……今、歴史を見る目を変え、歴史を考える姿勢を学び、農村の中で生き、耐え、従って大きな役割を果たしながら、改めて問い直されないまま、歴史の中に埋もれてしまった女性の姿をうき彫りにしたいと思っている。」

メンバーは、18名で、20代から60代までと幅広く、公務員、自営業、大学職員、パートタイマー、専業主婦と様々であり、それぞれ忙しい仕事のあいまをぬって、史料の収集と聞き取りを行っている。皆に共通しているのは、足立区の明治・大正・昭和（終戦まで）の女性たちの歴史を自分たちの手で跡づけてみたいという想いである。

④ れんげの会

さて、61年に開設された第3期「婦人大学」は、表4のようなプログラムで実施された。

この婦人大学は、「婦人問題に関する知識を深め地域における活動の実践力を養い、リーダーとして活動できる人材の育成」をめざして実施されているものであるが、そのねらい通りに、一定の学習の成果があり、その上、継続して学習活動を行っていくという気運が高まっており、先の第1期のように、この第3期も自主グループが生まれた。

会の名称は、「れんげの会」である。62年の年間テーマは、“マス・メディアの中の女性”であり、取りあえず、新聞の投書欄をみて、女性問題で投書しているものをチェックして、そのことについて話し合い、6月には講師を招いて、自分たちのまとめを聞いていただくという計画である。

6月以降は、小説やテレビドラマの中の女性、均等法¹²のその後、おかしいと思うコマーシャル、子どもの本（特にマンガ）は、放っておいていいのかなどについて、目を光らせ、話題にしていくという。

この婦人大学に参加し、修了後も、自主グループに加っているある主婦の方は、学習のまとめに、次のように書いている。

「——生涯学びつづけるために——軽い気持ちで出した一枚の葉書をきっかけに、ずいぶん多くの事を学ばせていただきました。これまで、婦人問題の認識すら持たず暮らして来た身にとっては、見るもの、聞くものすべてが新鮮で、あっという間の六か月でした。一番の収穫は、先生方に、きちっとした物の見方を教えていただいた事、そして、すばらしい皆さんにめぐりあえた事です。

表 4

月 日	学 習 内 容	講 師
6. 3	開講式・オリエンテーション 婦人問題とは	評論家 吉武 輝子
6. 10	なぜ、婦人大学で学ぶのか	立教大学教授 室 俊司
6. 17	自己紹介 - 入学の動機 -	
6. 24	婦人をめぐる世界の動き I	財団法人市川房枝記念会 事務局長 山口 みつ子
7. 1	婦人をめぐる世界の動き II	
7. 8	自立を求めて I - 「主婦」とは何か -	評論家 駒野 洋子
7. 15	自立を求めて II - 「主婦論争」をめぐる -	
7. 22	自立を求めて III - 話し合い -	
8. 26	女性が働くとき	弁護士
9. 2	男女雇用機会均等法	金住 典子
9.6 ~ 9.7	宿泊研修（野外レクリエーションセンター） - 自己表現のトレーニング -	心理カウンセラー 河野 貴代美
9. 16	高齢化社会に向けて I - 私達の実践 -	新しいホームを作る会 白川 すみ子
10. 1	高齢化社会に向けて II - どう生きるか -	日本女子大教授 一番ヶ瀬 康子
10. 7	高齢化社会に向けて III - 足立区の老人福祉 -	足立区役所・福祉部 老人福祉課長 神澤 道昭
10. 20	マスメディアの中の女性 I - グループ発表 -	福島女子短期大学教授 小玉 美意子
10. 27	マスメディアの中の女性 II	
10. 28	家庭の中の男女平等	新しい家庭科 We 編集長 半田 たつ子
11. 4	足立区婦人問題会議答申 I 婦人問題解決をめざして	足立区婦人問題会議 第二部会長 嶋 幸子
11. 11	足立区婦人問題会議答申 II 婦人問題解決をめざして	足立区婦人問題会議 第三部会長 武田 京子
11. 18	足立区婦人問題会議答申 III 婦人問題解決をめざして	足立区婦人問題会議 第一部会長 室 俊司
11. 25	女性たちの連帯のために	評論家 吉武 輝子
12. 2	まとめ・閉講式	

この婦人大学に参加させていただいたことは、私自身が生涯学び続けるためのものとなったような気がします。」

この女性は、学ぶことの意味、方法などについて、この大学で会得することができ、さらには、共に学ぶ仲間を得たことが、今後、非常に価値の

60 特集 民間生涯教育事業の現状と課題

あるものとなっていくのではないであろうか。

(2) 成人教育事業を通して

本区では、昭和54年より、住民の高度な専門的な学習要求に応えるために、「区民大学」を開講してきたが、さらに、59年より「成人セミナー」の開設によって、二つの成人対象の講座を実施してきている。

これらの学級、講座修了後も、継続して学習をしていこうという受講者たちの願いもあって、それぞれ自主グループを結成し、自分たちで会費を集め、講師を招いたりして、活動を続けている。

① はぐくみ

ここでは、まず、61年に開設された15期の「区民大学」（育ちあいの教育学）を取り上げてみよう。

表5 「育ちあいの教育学 — 子が育ち、自らを育てる —」

回	月 日	曜	内 容		講 師
1	5月15日	木	開講式・オリエンテーション		東洋大学文学部助手 上田 幸夫
2	5月22日	木	教育 — 人間として	公開講座	作家 高 史明
3	5月29日	木	日本人の子育ての再発見		大東文化大学教授 庄司 和晃
4	6月5日	木	文学にあらわれた教育・教師		国民教育研究所 所員代表 伊ヶ崎 暁生
5	6月12日	木	自由な「学校」 — ここにもある学校 —		江戸川区立小松川第二 中学校教諭 松崎 連之助
6	6月19日	木	体で学ぶ		大東文化大学教授 須藤 敏昭
7	6月26日	木	成長の可能性 — ちえおくれの子らを通じて —		東洋大学教授 藤島 岳
8	7月3日	木	おじいさん・おばあさんの力 — 家族・地域の力 —		文教大学教授 山村 賢明
9	7月10日	木	創造性を育てる — 読み聞かせの世界 —		立教大学講師 後藤 樽根
10	7月17日	木	働きながら育てる — 手をかけることの意味 —		児童文学者 片岡 輝
11	7月24日	木	グループの教育力		水海道市図書館長 谷貝 忍
12	7月31日	木	人間はどのように発達して いくのか・閉講式	公開講座	東京大学名誉教授 大田 堯

このプログラムは、今日の教育問題を真正面からとらえることなく、あらためて教育の本質にたちかえり、人間形成の姿を生き生きと描くことで教育を学んでいきたいという願いで組み立てられたものである。また、このプログラムは、この年の一月より二月、三月と、数回にわたって、教育研究者を助言者とし、区民6名の企画委員による熱心な協議からできあがったものである。

この区民大学を受講した一人の女性は、修了後、次のように記している。「人が育つのは、自然と人によってであると痛感しました。きちんとした本能を持って生まれてくる動物と違うのは、人はどのようなことも自ら選ぶことができる。遺伝や環境を選ぶことはできなくても、その中でも自分の生き方を選ぶことはできる。そのようにして自分を作ることです。

『手をかけること』は自分の願いを子供に押しつけている時には子供をダメにするけれど、やはり『手をかける』ことなしには子供は育たない。親が、大人が、自分の人生を実現するために努力し、たゆみなく選んで生きていけば、子供に十分に人生の意味を伝えうるし、『手をかけている』ことになる。ただこの場合、時には『ことば』によって子供に説明することも必要ではないかと思います。

子供が、自らの人生を選んで生きていくためには、さまざまな人生の可能性を知らせることが必要と思います。世の中にはいろいろな人がいて、それぞれのユニークな人生を生きている（創造している）ということ。人間はやろうと思えば、どんなことでも可能だし、どんな所にも行くことができる。これは危険をともないますが、その勇気を持つことは人間であることの最も大きな特質であり、すばらしさだと思います。」

また、小学生をもつ母親の一人は、「『育ちあいの教育学』これほど答えの出ない又、一人一人の受けとめ方によって答えの違う講義は今迄になかったのではないのでしょうか。教育の言葉から、つい現実をみつめがちですが、あらためて、人間形成の中での教育とは、学問だけでない事を痛感させられました。」と、感想を寄せている。

表 6

月日	内 容
5.28	養護学校の現場から 都立城北養護学校教諭
6.25	子供と大人の性教育 区内開業医（内科）
7.23	心理学に学ぶ その1 都立高校教諭
9.10	読 書 会
9.24	夜間中学を見学する (江戸川区立小松川第二中学)
10. 5	“ (足立区立第四中学)
10.19	心理学に学ぶ その2
11.16	日本の教育を考える
12.10	島と教育と都会の教育 区立中学校教諭
12.21	保護司からみた教育のあり方 “
1.28	“
2. 1	炎天寺の住職に聞く
2.15	心理学に学ぶ その3

ある小学校教師は、「足立区の区民大学には、区内の小学校に勤める一人の教員として参加させていただきました。学んだことはたくさんありますが、教えるという自分の立場で学んだことは、『子どものために努力する。努力は科学的でなければならない』ということでした。『子どものために』という言葉は、教師には殺し文句です。子どものために努力するのが教師の仕事ですから、当然といえばそれまでですが、その努力が、ほんとうに子どものためにになっているかということは、常に自らに問い続けなければならないと思います。努力は科学的に、また人間的にということです。

夏休みあけに子どもと出会ったら、今までとちがった角度から子どもを

見つめ、今までにない取り組みができたと思っています。」と記している。

受講した人、それぞれの立場で受け止め方が多少、異なると思われるが、教育の本質についての理解は、共通に認識されたようである。

この講座は、82名でスタートしたが、60名ほどで修了し、その後、このプログラムをより掘り下げた形で、区民大学セミナーを組み立て、6日間にわたって20名ほどの参加をえて、継続して学習活動が行なわれた。

こうした学習活動を経て、現在では、自主学習グループ「はぐくみ」が生まれ、教師、主婦、保母、自営業といった様々な人が集い自主的な学習を続けている。62年の学習活動計画は、表6の通りである。注目すべきは、講師陣が身近な人たちである。

② めめんと・もり

次に、16期の区民大学から生まれた自主学習グループ「めめんと・もり」を紹介してみる。

16期を迎えた区民大学は、人生80年時代といわれる今日、私たちの日常生活から死は、遠いところにある感がしている。こうした中で、むしろ死をより直視していくことによって、生をより充実した豊かなものにしていくのではないかという考えから、プログラムが組み立てられた。

このプログラムは、100名を越える応募者があり、受講者の選定に戸惑うくらいであった（表7・8を参照）。

この表9をみてもわかるように、高齢者に集中することなく、若い人もおり、強いていえば、40、50代の女性が多いといえる。この年代は、自分の死というより老親の死を思っでの参加ではないであろうか。このほか、60代の男性が、男性の中では多かった。

この講座を受講した方の感想をあげてみると。

20代後半の男性「『いのち』に対する考え方が、最近大きく変化してきたことを、今回の区民大学で教えられた。『生命倫理』、『献体』、『生きる権利・死ぬ権利』ということが盛んに語られるべき問題だとは思いますが、何を今さら、という気もする。これまで人間は日々の生活の中で、無言のうちに

64 特集 民間生涯教育事業の現状と課題

表7 「にんげんを考える ― これからの生と死 ―」

回	月 日	曜	内 容	講 師
1	10月7日	火	開講式・オリエンテーション	
2	10月14日	火	生命科学の進歩と人間のいのち 公開講座	サイエンス編集長 餌取 章男
3	10月21日	火	死の社会学的考察から ― 脳死・臓器提供・献体・葬儀 ―	東京大学 橋島 次郎
4	10月28日	火	生きる権利・死ぬ権利と「わたくし」	朝日新聞社編集委員 藤田 貞一
5	11月4日	火	日本人の死生観―民俗信仰を通して―	民俗学者 吉野 裕子
6	11月11日	火	私にとって生とは、死とは	東京大学 橋島 次郎
7	11月18日	火	病院の生と死	聖母病院院内 教育部長 寺本 松野
8	11月27日	火	西洋美術にあらわれた死の思想	東京芸術大学教授 若菜みどり
9	12月2日	火	「お葬式」を語る	映画評論家 筈見 有弘
10	12月9日	火	作家の死 ― 芥川～三島～ 公開講座	文芸批評家 吉本 隆明
11	12月16日	火	いま、少女たちは	フリー編集・ ライター 北村 年子
12	12月23日	火	現在の死をどうとらえるのか 閉講式	東京大学教授 養老 孟司

表8 区民大学応募状況

応 募 者	受 講 者	倍 率
119名	81名	1.4倍

表9 年代別及び男女別応募状況

男		年 代 別	女	
応 募 者	受 講 生		受 講 生	応 募 者
4	4	20代	8	8
9	9	30代	6	6
3	3	40代	13	20
7	5	50代	15	23
13	6	60代	8	14
10	3	70代	0	0
2	1	80代	0	0
48	31	合 計	50	71

『いのち』を語ってきたように思う。それがいつの間にか、生活の中から『いのち』の概念が消えてしまった。食事が出来合いの物やインスタント食品が多くなっていることも、あながち無関係とは言えないだろう。そういう生活形態を営んでいる我々は、だから今こそ、生活の節目である、年中行事や冠婚葬祭などの儀礼を考え直してみる必要があるのではないか。商業主義に乗せられ、やたらと華美に走った儀礼を行ったり、献体するから葬儀は無用という考えをする前に、『いのち』を想う心について考えてみたいと思う。」

40才の女性「生と死について考えるという人間の根源的なテーマにひかれて参加させて頂きました。若い人にとっては死はまだ他人事の様に思え、ある程度の年齢に達した人には、わかっていても出来るなら避けて通りたい様な課題でした。でも、『死は長幼の序あり』という訳にはいかず、子が親に先立つ事は決して珍しい事ではない事実です。……（略）……いずれにしても、この世に生を受けた以上、自分の人生は自分自身のもの、喜びに悲しみに眠れない夜があっても『生きてきて良かった』と思える様に残りの人生を送りたいと思います。残された人生（時間）が少なくなればなる程、そう思えるために今を大切に作る——そんな生き方が出来る様に今からでも心がけていきたいと思います。何気なく流れて行く時間を少しでも止め、生きること、死ぬことという人間の根源について少しでも考える機会を与えて下さったことに深く感謝致します。」

この二人のように、年代、性別、職業などによって、それぞれの受け止め方があったようであるが、共通しているのは、最初は“死”を真正面から取り上げたことに対する驚きと拒絶の感があったようである(表10参照)。

ただ、この二人の感想に代表されるように、非常に重たく、大事なテーマであって、その学習を引き続き行なうことにスムーズに移行していった。

次のゼミナールのプログラムは、区民大学の12回のプログラムとは違って、受講生たちの意見で組み立てられたものである。

表10

回	月 日	内 容	講 師
1	2/24 (火)	メディカル・ソーシャル・ワーカー の見た生と死	メディカル・ソーシャル・ ワーカー 関根真希子
2	3/3 (火)	死を学習する	ジャーナリスト 若林 一美
3	3/10 (火)	ガラスのうさぎと私 -東京大空襲-	作家 高木 敏子
4	3/17 (火)	優生保護法と歴史と将来	三菱化成生命科学研究所 主任研究員 米本 昌平
5	3/24 (火)	キリスト教の生と死	市ヶ谷教会牧師 佐藤 邦宏
6	3/31 (火)	仏教の生と死	浄正寺住職 多賀谷崇峰

このゼミナールを経て、62年4月には、自主グループとして発足し、学習を続けている。この「生と死」の問題に取り組んでいる市民サークルは、全国でも初めてではないかということで、大変注目すべきことでもあると思う。

グループ名は、「めめんと・もり」という名称で、ラテン語であり「死を見つめて生きていますか」という意味である。また、このグループのメンバーは、若い人から年配の人まで、幅広く、職業も学生、看護婦、自営業、会社員、主婦と様々である。

62年度の活動計画は、次の通りである。

- 6/9 講 義「からだの関わりと死——ホスピスを中心に——」
- 7/14 討 論 会「死にゆく者のために、我々は何をすべきか」
- 9/8 講 義「日本における死の様式の近代化＝家・病院・葬祭産業＝」
- 10/13 調査報告「火葬場における人間の生き様の考察」
- 11/10 講 義「死生の合理的管理（死の隔離）＝生命保険・病院・国家＝」

会員は、12名であり、専任の講師として、東京大学大学院社会学研究科博士課程の若い研究者を迎えている。

この自主学習グループの存在は、大変貴重である。高齢化社会を迎える

中で、一方で核家族化の今日、高齢者との日常的なふれあいがきわめて少いために、“死”が日常から遠くなっており、死亡すれば、葬儀屋、火葬場に任せられてしまう。死をほとんど意識できず、死の意味を捉えられなくなっている。こうした現代に生きる人々にとって、しっかりと、死を捉え、そのことによって、今日ある“生”あるいは、“生命（いのち）”を、その尊厳さ、大切さなどを理解することができるのではないであろうか。こういった意味で、このグループの存在理由は、きわめて大きいといえよう。

おわりに

この小論で取り上げたのは、足立区において、社会教育行政が提供している学習機会を通して誕生している自主的な学習活動である。もちろん、最初に指摘したように、より多くの住民が、他の機会、場で学習していることは否定できない。しかし、取り上げた成人一般を対象とするプログラム（区民大学）のように、誰でもが自由に応募でき、参加できる学習機会は、決して多くはない。

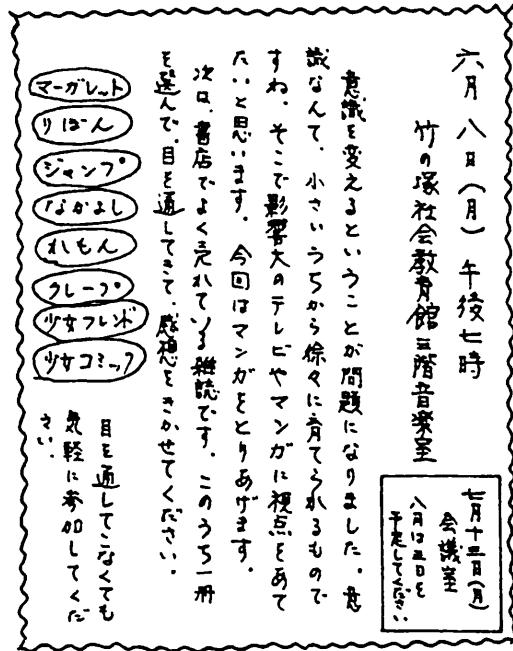
こうした場では、若い人から高齢の人までまた、様々な職業の人たちが、共通の関心であるテーマに寄り集って、相互の意見をかわし合える自由な学習の場となっているといえよう。すでに記したように、その場を断ち切るのではなく、継続させるために、自主的な学習グループとして、それぞれの人が、自覚的に自己の学習課題（学びたいこと）を明らかにし、それを共同学習のなかで学んでいくというプロセスが生じてくる。

それでは、社会教育行政の果たす役割は、何であろうか。まずは、学習機会の提供であれば、適切なプログラム内容であり、学習方法である。適切な内容、方法によって、学習者は十分な学習を行うことができる。そして、十分な学習の継続性をもたらすために、自主学習グループ化への援助であり働きかけである。こうした一連のプロセスを経て、住民の学習活動が促進され、自由な学習活動が展開されるのである。そして、こうした自

由な学習の場で学んだことが、新しい地域社会創造の活動に生かされることになっていくのであろう。

〔注〕

- (1) 足立区では、人口5万人～6万人、面積で300ha～500ha(半径1 km程度)を河川鉄道、幹線道路などで“13”に区分した地域である「ブロック」に、各施設を配置している。現在、このブロックのセンター(社会教育館、体育館、図書館)は、8館、開館している。62年中に3館、63年に1館という計画である。
- (2) 足立区では、他区に先がけて、60年4月に教育委員会社会教育部に生涯教育推進担当が設置された。
- (3) 『足立区における生涯教育のあり方とその基本的方策について』第三期足立区社会教育委員会議の答申 60年8月。
- (4) 『学びあうまち足立の創造をめざして』足立区生涯教育推進プロジェクトチーム62年6月。(設置は60年12月。)
- (5) 斉藤伊都夫「自己学習の原理」(斉藤伊都夫・辻功編著『社会教育方法論』第一法規、50年)44頁。
- (6) 草間俊郎「学習社会の形成」(古賀寿編『現代学習の構図』学文社、58年)、31頁。
- (7) 61年に実施された足立区政に関する世論調査(調査対象——区内在住20才～80才未満、標本数2,000)
- (8) 58年に区の出費で設立された財団であり、区の社会教育施設、体育施設等の管理・運営を区から委託されている。
- (9) 現在42館、14館を今後建設する。主に小学校区の単位としており、住民の身近な生涯学習の場となっている。
- (10) 社会教育課への自主学習グループとして登録すると、講師が派遣される。
- (11) 『滞(みお)』第1号—60年1月、第2号—61年1月。
- (12) れんげの会の『通信』より



(13) 成人セミナー、区民大学のテーマ変遷

〈成人セミナー〉

- 59年 第1期 「快適な住まいを考える」
 第2期 「日本の古典芸能——能と狂言の魅力を探る——」
- 60年 第3期 「生活の場——都市——をとらえる」
 第4期 映画をもっとたのしむために」
- 61年 第5期 「ヨーロッパ近代絵画——18C末～19C末、魅力の画家をめぐって——」
 第6期 「おしゃべり広告入門」
- 62年 第7期 「——江戸の庶民文化——浮世絵版画の世界」

〈区民大学〉

- 54年 第1期 「日本文化の特質を考える」
 第2期 「日本人を考える」

70 特集 民間生涯教育事業の現状と課題

55年 第3期 「日本経済の動向」

第4期 「万葉の世界」

56年 第5期 「江戸の庶民の生活と文化」

第6期 「王朝和歌の開花」

57年 第7期 「日本の古美術——絵画と彫刻」

第8期 「新古今時代——美の秀峰」

58年 第9期 「高齢化社会を考える」

第10期 「心とこころ《ふれあい》の心理学」*企画委員会（住民参加）による

59年 第11期 「中国古典文学『唐詩選』」

第12期 「異文化とのふれあいを求めて——文化人類学の世界——」

60年 第13期 「これからの科学技術と私たちの生活」

第14期 「現代社会と音楽——都市・メディア・環境——」

「現代社会と宗教」

「四十年の節目——文学を通して考える——」

61年 第15期 「育ちあいの教育学」*企画委員会（住民参加）による

第16期 「にんげんを考える——これからの生と死——」

62年 第17期 「国際化社会と異文化の理解」（表11参照）

* 企画委員会（住民参加）による

〈参考資料〉

(1) 『足立の教育』足立区教育委員会。62年。

(2) 『堀る』、『燿』第4、5回婦人セミナー学習記録。55、56年。

(3) 『日本語ボランティア講座』第15回婦人セミナー学習記録。61年。

(4) 『かけはし』第82回婦人学級学習記録。61年。

(5) 第1～3期婦人大学学習記録、59-61年。

(6) 第15、16期区民大学学習記録、60、61年。

表11 「国際化社会と異文化の理解」

回	月日	曜	学 習 課 題	学 習 内 容	講 師
1	5/15	金	オリエンテーション	開講式・自己紹介・班分け	
2	5/21	木	日本人の異文化体験 (公開講座)	日本人の異文化体験の歴史を探りながら、今日のありようと課題を明らかにしてみる。	国際基督教大学教授 星野 命
3	5/29	金	世界の教科書にみる日本	世界の教科書で、日本はどのように扱われているか、それを知ることにより日本の世界における位置・役割をつかむ	立教大学名誉教授 別枝 篤彦
4	6/5	金	日本的経営の受容と拒否	日本の経営のあり方が外国で見直されており、その受け入れや拒否のさまを知る	筑波大学助教授 駒井 洋
5	6/12	金	地域社会と国際化	国際化社会の中で、地域社会レベルでの国際化、交流理解のあり方について学ぶ。	地方自治協会 主任研究員 渡戸 一郎
6	6/14	日	野外見学会「横浜を訪ねて」	開港資料館等を見学し、異文化の受容の歴史を学びとる。受講生同志の親睦をかねる。	横浜市海外交流協会 伊藤 克己
7	6/16	火	在日韓国・朝鮮人 —在日の生活の中で—	在日韓国・朝鮮人の生活のありようを認識し、今日の問題点を明らかにしてみる。	週刊朝日編集部 前川 恵司
8	6/26	金	日本と東南アジアの国々	日本と深い関係にあるアジアの国と日本との関係を知り、あり得べき姿を考える。	麗澤大学助教授 竹原 茂 (ウドム・ラタナボン)
9	7/3	金	中国残留孤児と私たち	中国残留孤児の問題を教育の現場からつかみ、私たちのとるべき道を学ぶ。	葛西小学校 日本語学級教諭 善元 幸夫
10	7/10	金	私の異文化体験	区内に在住している外国人の方々に、毎日の暮らしの中で感ずる日本観を語ってもらう。	マリア・加藤 ゲニー・田中 ジャック・トランス
11	7/17	金	国際人を育てる	日本人が国際化の中で、日本、海外で良き国際人となるためには。	フリーライター 大沢 周子
12	7/24	金	日本の国際化（公開講座）	国際化社会の中での日本の役割、日本人のあるべき方向について。外国人ジャーナリストの目から。	アラブ・ニュース 特派員 ユ・デ・カン・ユスフザイ